

例

えていうと、意欲的な学芸員がいる博物館のような書物である。そこで研究成果公開イベントが開かれた。メインタイトルに隠れて、あまり外の目立つ所には貼っていないが、「東アジアにおけるラジオの時代」というテーマは、場の歴史的な特質とメディアとの関わりを問うものであるだけに魅力的で、問題提起的である。

論文セクションである第一部・第二部のほかに、資料展示コーナーの第三部・第四部が設けられている。そこに並べられたラジオ研究書を、著者本人に語らせる第三部の企画は、意外と面白いアイデアで、かつての自らの研究の意義と限界にふれる津金澤聰廣や吉見俊哉や黒田勇の率直な自己批評は、それ自体がラジオ文化研究の歴史と現在を浮かび上がらせている。まずまずの出来にまとまった

それこそが、ファシズムとは言えまいか。敵か友かの路線を迫るファシズムの語り口でしかファシズム批判ができないわけではないはずである」という結びに、深く共感した。拍手。

もう一人の来賓竹山昭子は、『玉音放送』（晩聲社）や『ラジオの時代』（世界思想社）などでラジオ文化研究を切り開いてきた先駆者、日本のラジオ史における天皇の「声」の封印とその解除を話題にする。ご自身の研究のほんの「さわり」だけだ

けれど、やはり聞かせる。そして貴志俊彦と孫安石、二人の編者が、いわば担当主任学芸員として登壇する。地政学的な「権力空間」と交差し重層する「ラジオ・メディア空間」に作用していた力を、「放送協会システム」のもとの「電波戦争」から分析しようという。上海の日本語ラジオ放送局にお

Book Review

『戦争・ラジオ・記憶』 貴志俊彦、川島真、孫安石編



勉誠出版 3675円/きし・とし
ひこ 島根県立大学大学院助教
教授。かわしま・しん 北海道大
学大学院助教。そん・あんそ
く 神奈川大学助教。

のは、働きの若手（つまり編者）が、自分でも面白がりながら飛び回ったからだ。実際、科研費などの外部資金を工夫して導入し、準備に6年の手間と資金とをかけたという。そのなかで吉林省「檔案館」が所蔵する、満州国時代のラジオ放送の録音原盤に行き当たり、NHKの特集番組の製作にまで協力した。プログラム（つまり目次）を

る統制の実態や、日本人捕虜による中国奥地の日本語放送、巡廻映画や放送による「抗戦教育」など、この電波戦争はさまざまな研究テーマを含む。

もう一人の編者である川島真の「満州的ラジオ空間」の分析で始まる第二部は「ラジオと『帝国』で、『戦争とラジオ』の第一部の延長。しかし全体として

みると、放送局の仕組みや実態の把握が前面に出ている第一部に比べ、運ばれた「声」と聴取者の「耳」とを重視している。「流行歌」（李承機）や「日本語会話」（上田崇仁）、「韓国語放送」（金榮熙）への注目も、そうした声の政治を考える素材となろう。そして第四部の資料紹介のコーナーは、日本のみならず台湾や中国の資

ると、第一部の始まりは、まず来賓のご挨拶。佐藤卓己はラジオ文明の時代精神を、「ブルジョアの公共性」の19世紀モデルから、「ファシストの公共性」の20世紀モデルへの転換において、浮かびあがらせる。すなわち、理性的な討議と「読書」の持続的な注意力が作りあげる教養文化から、「ながら聴取」の気晴らしのもとで醸し出される参加感覚と情緒的な共感や安心感へと、公共性を満たすものが遷移していったという。

感銘を受けたのは、その「ファシストの公共性」の語を、単なる罵倒語として、まさにファシスト的に使いつぶすのではなく活かそうという志だ。自分もまた、時と場合によってはファシストになってしまふ危険性がある、という冷静な自己認識のもとで、この概念を育ててゆくこととする。「弱さの糾弾は、強者のみを正当化する政治に至る。

たがゆえの禁欲だろう。出口の来場者アンケートに勝手な感想を書くとなれば、編者三人の理論的展望と研究枠組みの提示とが、微妙に後回しにされているあたりへの不満である。東アジアで考えるなら、支配統制だけではなく、公共性の構造転換、普及にかかった長い時間音の権力性、リスナーの想像力

などをとらえる「多層的なアプローチ」が必要である。であればこそ、その展開の可能性を見渡して、もつと大胆に語る背伸びの一章が欲しかった。来賓の名調子が印象的だっただけに、編者の短い「序言」だけではいかにも淋しい。誤解しないほしいが、いうまでもなく私は、この「東アジア・ラジオ文化博物館」の研究活動に、大いに期待しているのである。◎

評 佐藤健二 東京大学大学院教授

1920—60年代のラジオ時代を検証

料所蔵機関をとりあげ、残された音そのものと向かいあうことを含め、これからの研究者を現物資料の調査へと誘っている。私が出版社の制作担当なら、第三部も第四部も論文本文とは異なる資料性をもっと強調し、密な二段組みにして、その充実を売りにする。そして井上保『日曜娯楽版』時代（晶文社）などの事例研究を多く増補し、文献リストにもある第一回「全国ラジオ調査報告」の調査票調査や、レコードで残ったラジオ放送記録のリストなどをも含め、多様な資源の厚みを共有するアーカイブスにしたらどうかと提案しよう。もちろん編者が無闇に拡げなかったのは、タイトルを「戦争・ラジオ・記憶」とし